
眠りの砂

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠りの砂

【Nコード】

N9962A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

お祖母ちゃんは、夜眠くなった時、『眠りの精』が瞼に砂をかけたのだと言いました。私はお祖母ちゃんに『眠りの精』になりたてのイーベルのお話を聞きました。ずっと昔のお話です……。

（前書き）

これは、童話企画小説です。今回のテーマは『眠り』です。「十月の童話」で検索すると、他の先生方の素敵な作品も読むことができます！

子供の頃、私はお祖母ちゃんのお話を聞きながら、うとうとと眠ってしまつことがよくありました。お祖母ちゃんのお話はとても上手で、お話の聲が子守歌のように耳に気持ちよく聞こえてくるのです。もっとお話が聞きたくて、眠らないよう瞼を開けておこうとするのですが、自然と瞼が重くなって閉じてしまいます。

そんな時、お祖母ちゃんは言いました。

「『眠りの精』がお前の瞼に砂をかけたようだね」と。

「『眠りの精』ってなあに？」

私がどうにか眠らないように頑張つて瞼を上げて聞くと、お祖母ちゃんは言いました。

「『眠りの精』は肩に砂袋を背負つた小さな小人だよ。眠らない人を見つけると、瞼に魔法の砂をかけて、安らかな眠りに導いてくれるのだよ」

「それじゃあ、今、私の側に『眠りの精』が来てるの？……」

ふさがりそうな瞼を一生懸命持ち上げながら、私はキョロキョロと辺りを見渡しました。けれど、『眠りの精』の姿はどこにもありません。

「見えないよ」

不満そうなお祖母ちゃんに言いました。

「『眠りの精』の姿は目には見えないんだよ。だけど、ずっと昔は時々姿を現すこともあったらしいよ」

「ほんとうに？……」

「今度そのお話をしてあげようね」

お祖母ちゃんの声が遠くで聞こえてきます。『眠りの精』の魔法の砂が、私の瞼にたくさんふりかかって、私はそのまま眠っていました。

『眠りの精』のいない昼に、私はお祖母ちゃんから『眠りの精』のお話を聞きました。夜にお話を聞くと、『眠りの精』がすぐにやってきて、私の瞼に砂をかけてしまうからです。私のお祖母ちゃんもお祖母ちゃんのお祖母ちゃんに聞いたお話だと言っていました。お祖母ちゃんのお祖母ちゃんも、お祖母ちゃんのお祖母ちゃんのお祖母ちゃんのお祖母ちゃんに聞いたお話なのかもしれません。とても、むかしのお話のようです。

ある国に、エーベルという名前の『眠りの精』がいました。彼は『眠りの精』になったばかりの新米で、とても張り切っていました。夜遅くまで遊びに夢中でなかなか眠らない子供達を見つけると、すぐにやってきて『眠りの砂』をふりかけます。親の言うことを聞かず、いつまでも起きている子供たちも、エーベルの砂の力で、瞼がすぐに重くなります。眠くて眠くて、遊びかけのオモチャを手に持ったまま、ウトウトと目を瞑ってしまいます。

オモチャを片づけてベッドに行く子供たちを見て、エーベルは嬉しくなってきました。

「僕の砂の力はたいしたもんだ。アツという間に皆を眠らせてしまっぞ」

子供たちは、ベッドに入るとすぐにスヤスヤと安らかな眠りにおちていきます。人の寝顔ほど、エーベルの好きなものは他にありません。寝息を立て気持ち良さそうに眠っている人を見ると、エーベルはとても幸せな気分になります。

反対にエーベルが大嫌いなのは、眠らない人です。たまに、ベッドに入ってもなかなか眠れない人を見かけることがあります。眠ろう眠ろうとしても余計に目がさえて、全く眠らないのです。ベッドの中で『羊が一匹、羊が二匹……』と順番に数え、頭の中に九百九十九匹の羊を登場させた人もいます。

そういう人を見つける、エーベルは大急ぎで飛んできては、いつ

もより余分に『眠りの砂』をふりかけます。そうすると、パツチリと開いていたその人の瞳も、砂の重さに耐えかねて閉じていくのです。そして、千匹目の羊を登場させる前に、ようやく眠りにおちていきました。

「やれやれ、彼の頭の中が羊で溢れるところだった。羊を数える人間ほど嫌なものはない」

エーベルは眠り始めた人を見て、安心しました。

眠らない人は注意しておかないといけません。エーベルは翌日もその人の元に、ちゃんと眠るか確かめに行きました。その人は、デイルクという友達と一緒にいました。

「昨日は久しぶりにぐっすり眠ることが出来たよ。おかげで、千匹の羊を数えずにすんだんだ」

彼は友人のデイルクに言いました。すると、デイルクは目を見開いて答えました。

「千匹の羊なんてたいしたことはない。僕は昨日二万匹もの羊を頭の中で描いたよ。ちょうど二万一匹目を数えた時、一番鶏が鳴いて夜が明けたのさ」

二万一匹の羊！ エーベルはデイルクという青年の言葉に驚きました。今までそんなに羊を数えた人間は見たことがありません。

「それはすごいな。まだ眠れないのかい？」

「ああ、僕は眠ったことなど一度もない。どうやら僕は眠らなくても生きていけるらしいよ」

デイルクは、大きく目を開けて言いました。彼の臉が眠りで重くなることはないのでしょうか？ エーベルは、デイルクの言葉に大きなショックを受けました。眠ったことがない人間がいるとは思ってもみなかったのです。

「僕の『眠りの砂』なら、きっと彼を眠らせることが出来るだろう。眠らない人間などいるはずがない！」

エーベルはデイルクを眠らせようと決心しました。眠らない人間ほど嫌なものはありません。『眠りの精』の名誉にかけても、彼を

眠らさなければならぬと、エーベルは思いました。

その日の夜、エーベルはさつそくディルクの家に忍び込みました。『眠りの精』の姿はとても小さくて、人間の手の平くらいの大さしかありません。動きも素早く、人間の目では見ることが出来ない。ディルクに気付かれることはありませんでした。

もう夜中の十二時は過ぎていましたが、ディルクはまだ起きていました。欠伸一つせず、ランプの灯りの元で熱心に本を読んでいた。

「さて、さつそく僕の砂をかけてみるか」

エーベルは手始めに、砂袋から『眠りの砂』を一握り掴み、ディルクの脛にふりかけてみました。小さな砂の粒は、ランプの光に照らされながらディルクの脛めがけて飛んでいきます。

砂は見事にディルクの脛にふりかかりました。普通の人間なら、眠気を感じ欠伸をするはず。でも、ディルクは何事もなかったかのように、本を読み続けています。

「チツ、おかしいな。それなら今度はもっと多くかけてやる」

エーベルはさつきかけた砂の倍の量を、ディルクの脛にふりかけました。こんなに多く砂をかけたなら、眠くてたまらなくなり、すぐにベッドに飛び込むはず。

ですが、今度もディルクは何事もなかったかのように、目で本の文字を追っています。これには、エーベルも驚きました。

「……こいつには『眠りの砂』が効かないのか？」

こんなことは初めてです。エーベルのプライドはとても傷つきました。人を眠らせることの出来ない『眠りの精』なんて、眠りの精失格です。

「今度こそ、絶対眠らせてやる！」

エーベルは、もう一度、両手いっぱい砂をディルクの脛めがけて投げつけました。こんなにたくさん眠りの砂をかけられては、普通の人ならその場に気を失って眠り込んでしまいます。あまりに

たくさん砂をかけすぎると、人は眠り続けてしまい目を覚まさなくなってしまうのです。とても危険なことです。それでもエーベルはかまわず砂をかけました。

けれど、ディルクには全く効きませんでした。

「……………」

エーベルは言葉を失い啞然としました。エーベルの小さな顔が次第に青ざめていきます。人を眠らせることの出来ない『眠りの精』なんて、皆の笑い物です。

「クソ！ こうなったら、ありったけの砂をかけてやるぞ！」

エーベルの顔が怒りのため、青から赤くなつていきます。エーベルは砂袋からありったけの『眠りの砂』をディルクめがけて投げつけました。『眠りの砂』が煙のように部屋中に広がります。ディルクの瞼だけでなく、顔中、体中にもふりかかりました。

「……………ファイ、ファイ」

『眠りの砂』は、エーベル自身にもふりかかってきました。砂の粒がエーベルの鼻をくすぐり、くしゃみが出そうになります。

「ハックション！」

エーベルは大きなくしゃみをしました。あまりに大きなくしゃみだったので、本を読んでいたディルクの耳にも微かに聞こえたようです。

「ん？……………」

ディルクは本を読む手を休め、薄暗い部屋を見渡しました。

「気のせいかな？ なんだか誰かがくしゃみをしたような音がしたけど」

不思議に思ったディルクが、また本に目を落とした時です。ディルクはビツクリして目を見張りました。

「これは！？」

ディルクが驚いたのも無理はありません。ディルクが読んでいた本の上に、エーベルが寝ころんでいたのです。エーベルは本の上で、スースーと寝息を立てて眠っていました。エーベルがくしゃみをし

た時、『眠りの砂』がエーベルの臉にもふりかかってしまったのでした。

エーベルは、とても気持ち良さそうにぐっすりと眠っていました。リズミカルに寝息を立て、お腹を上下させています。人形のように小さなエーベルが、安らかに眠っている姿を見ると、ディルクの臉が次第に重くなってきました。

「ん？ なんだろう頭がぼーとしてきたぞ」

今まで眠ったことのないディルクに、初めて眠気が襲ってきたのでした。

「これが眠いということか？」

ディルクは大きな欠伸をしました。目を開けていようとしても、自然と臉が下がってきます。心地よい眠りが初めてディルクにも訪れてきたのです。

「……眠るといふのもいいものかもしれないな」

ディルクは、エーベルが眠っている本の上の側に突っ伏すと、そのまま眠りにおちていきました。

翌朝。一晩中ぐっすりと眠っていたエーベルは、ようやく目を覚ましました。『眠りの精』が自分の砂で眠ってしまうなんて、今まで聞いたこともありません。

エーベルは大きく伸びをしました。頭はとてもスッキリとしています。

「おや？ 彼はやっと眠ったようだぞ」

エーベルは、自分の横にディルクの大きな顔があるのに気付きました。彼は机に伏したまま、ぐっすりと眠り込んでいます。ディルクの寝息が、エーベルの小さな体にかかってきます。エーベルはその姿を見て、ホッと安心しました。

「僕の『眠りの砂』が効いたようだな」

エーベルは、眠っているディルクの顔を見て満足し、笑顔になりました。ディルクが眠ったのは、エーベルの砂のせいではなく、エーベルの寝顔のせいだとは気付かないようでした。使命を果たした

エーベルは、殻になった砂袋をかつぐと、高らかな笑い声を上げながら素早く去っていきました。

これが、お祖母ちゃんに聞いた『眠りの精』のお話です。どうやら、眠りの精の寝顔は、『眠りの砂』よりも眠りを誘うようです。私もそろそろ眠くなってきました。『眠りの精』が、私の瞼に砂をかけたのかもしれない。私には眠りの砂がよく効くようです。それでは、皆さんお休みなさい。

完

(後書き)

書けるかどうか微妙でしたが、なんとか書けました！今回は書いていて楽しかったです。ドイツ民謡『眠りの精』をイメージして書きました。書き方も出来るだけ『童話』っぽくなるように意識してみました。不眠症の人の元に『眠りの精』が来てくれるといいなあと思います。(^^)

最近の私は、ベッドに入ったらほんの数分で眠ってしまうことが多いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9962a/>

眠りの砂

2010年10月8日15時09分発行